

トピックス

生き残るヒント

奥羽大学歯学部生体材料科学講座 龍方 一朗

「日本医用歯科機器学会」をご存知だろうか。1990年に「日本歯科道具研究会」として発足し1997年に「日本歯科道具学会」に改名、2000年に冒頭の名称に改名された学会である。歯科医療の各種の治療分野で使用される器具の持つ様々な道具としての機能を、使い手側である臨床家の「使用感や使い勝手」について包括討議し、なおかつ臨床家を中心とした改良改善の提言や、新しい開発アイデアなどを発表する場を提供することを目的としている。毎年一回の総会と研究発表大会を開催し、製品の発表の他に、話題性のある特別講演やシンポジウムなどの企画も行われている。しかし、大学等の関係教育機関にこの学会に対応する講座・研究所がないために研究者や臨床家の参加が少なく、その結果として、構成会員数が伸び悩んでいるのが現状である。

個人的には、毎回発表の中から優秀発表者に道具大賞として、金賞、銀賞、銅賞、アイデア賞、努力賞が表彰されるこのユニークな学会が非常に興味深いのである。が、ユニークなだけではない。

この学会で発表された器材の一例を挙げる。平成23年に行われた第21回研究発表大会で金賞を受賞した「エンド用デンタルミラー」¹⁾である。歯内療法の際、直視できない根管口を見るにはデンタルミラーが必要であるがファイルなどの治療器具などを挿入した状態で見ようとするとミラーだけで見る時とは異なり、よく見えない。そこで市販のデンタルミラー部の円の中心から半径に該当する部分をダイヤモンドバーをつけたタービンで切削して幅1.5mmのスリットを形成する。使用時はミラーを根管口が見える角度にセットした後、ファイルのスリットから入れるか、ファイルをミラーに挿入してからミラーをセットし、操作する。このことで視線と根管走行方向を一致させ、穿孔などのトラブルを回避し、ミラーで確認とファイル操作が同時にでき治療時間の短縮、ス

トレス軽減につながるというものである。

ここには画期的な発明や著しいQOLの向上に繋がるものはない。ちょっとしたアイデアや工夫で現在使用している器材で対応でき、毎日行われる「普通」の診療に活かすことができる。そして何より、ここで得た知識や技術が直ぐに患者に還元されるのである。こういった研究発表がこの学会の魅力であり、国民皆保険制度が根付く日本において患者と術者の双方に非常に有意義であると考ええる。

日本中の歯科医療従事者が日々の臨床のなかで起こる小さな疑問、患者側からの要望などをコツコツと拾い、コンピューターのソフトのように短いスパンでアップデートを重ねていたのであれば、今現在当たり前だと思われる歯科治療に伴う特有の不快感や煩わしさは少なからず改善されていたのではないだろうか。

先が見えないと言われている歯科業界を生き残るヒントは案外、今や歯科系学会最大の会員数1万2000人超を誇る日本口腔インプラント学会ではなく、会員数200人に満たないこの超マイナー学会に潜んでいるかもしれない。

文 献

- 1) 西山和彦：エンド用メタルミラー. 日本医用歯科機器学会誌 17; 11-14 2012.